



木木だより

2018
秋号
vol.26

友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌

芙蓉の花
 お父ちゃんお父ちゃんの好きを
 芙蓉が咲いたよ
 そう真美子かいた
 その声 その眼
 芙蓉の美しさにそっくりかいた



芙蓉の花

館長エッセイ

【第二十六回】
「思索ノート」の表題から
その想いを探る〈後編〉

真民詩を読み解く ②⑤

「軽さ」が「涼しさ」になる
無一物が無尽蔵になるように「涼しさ」

真民詩とわたし

世界の平和を願い続けるため
エルサルムに真言碑を建立

おぼろ やすお
小原 靖夫 さん

記念館からのお知らせ

企画展「坂村真民が愛した草花と木
～野に咲く草花や木を詠った詩と写真とのコラボ～」

【第二十六回】心のうちをつぶさに記した976冊の記録

「思索ノート」の表題からその想いを探る

〈後編〉

2か月の中断の後、ノートが再開されます。この間真民は、一遍上人に関する本を読み続け、一遍上人の生き方とその思想に大きな影響を受けます。

52冊目から59冊目(昭和33年10月から昭和34年5月)は「たんぼぼ日記」に題名が替わり、その最初のページには「今朝から「タンポポ日記」を更新して、私の精進の跡を書き残そうと思う。」と書かれています。

60冊目から63冊目(昭和34年5月から7月)は「眞民日録」と変更されています。ノートには「今迄書いたのをかえりみて忸怩たるものがある。自分では進歩していると思っても、ちつとも進歩していない。(中略)一体どうしたら、本当のものが書けるだろうか。六十冊目のこのノートから、眞民日録とした。たんぼぼという言葉に甘さを感じたからである。わたしは、わたしにつきまとう甘さ

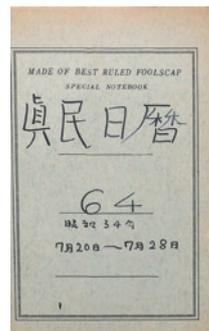
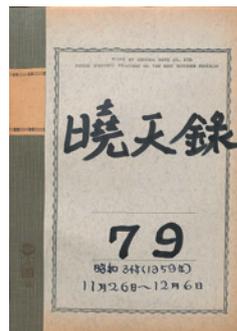
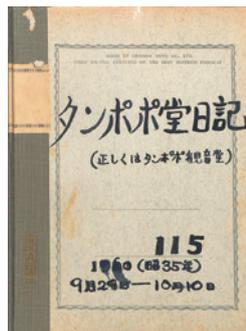
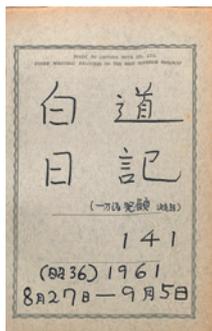
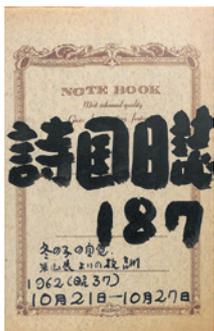
を絞り除かねばならない。」と書かれています。

64冊目から78冊目(昭和34年7月から11月)は「眞民日曆」と変更され、「六十四号から、眞民日曆とした。ともかく日録であつてはならない。日曆でなければならぬ。日記はただの記録では駄目だ。日記は生命体でなくてはならない。日々生長してゆく曆でなくてはならない。」と書かれています。

79冊目から114冊目(昭和34年11月から昭和35年9月)は「暁天録」に変わり、「わたしは暁天に生きる詩人―いや生きようとする詩人である。暁天だけがわたしを生かし、わたしを人間らしくしてくれる。(中略)あくまで日曆ではないので、この次からは暁天録としたいのである。度々変わるけれども、これも自己の未熟さからくる迷いの表れかも知れない。」と書いています。

115冊目から136冊目(昭和35年9月から昭和36年7月)は「タンポポ堂日記」と変更されました。「みんなが氣楽に遊びにくる、そんな堂舎を建てたい。お茶をのみあつたり、はなしをしたりと、ときには酒をのみあつたりする、そんな小さな家を建てたい。たんぼぼ堂と名づけて、遠くからきた人をとめたりもしたい。いつかなしとげたいわたしの楽しい夢の一つである。」と書かれており、この後も「タンポポ堂」への想いが数日にわたって書き綴られています。

137冊目から140冊目(昭和36年7月から8月)は「えとらんじえ日記」と変更され、「月日は百代の過客にして往きかふ年も旅人なり」という松尾芭蕉の「おくのほそ道」の有名な冒頭の文を書き、「月も日も年も新しくなるのが旅だ。えとらんじえはきつと私を新しく再生させてくれるにちがい



ない。西行―芭蕉の系譜を辿るのだ。本当の詩人真民として新しい旅に出よう。旅人(えとらんじえ)は身軽であることだ。」と書かれています。

141冊目から159冊目(昭和36年8月から昭和37年2月)は「**白道日記**」と変更されています。ノートには、「白道日記」とすると、それだけでもう筋金が入り、目的もはっきりする。えとらんじえにはどこかに伊達者(ダンディ)なところがある。むろんそれはそれでいいが、世尊の道のことを考えるとそんな処にとどまっていたら、せっかく自分の道を見出そうとする心にゆるみが生じたり、また弱いわたしにどんな魔が近よつてこないとも限らない。(中略)今暁から白道日記とするのだ。これはえとらんじえ日記からの更に二段の飛躍と考えてよい。」と書かれている。

160冊目から186冊目(昭和37年2月から10月)は「**タンポポ堂日記**」と変更されています。ノートには、かつての教え子から手紙が来て、先生の詩は私たちの世界を越えて遠くへ行つてしまわれた、と書かれていたのを見て、「自分でもわからず何かを求めて遠い旅に出たのですが、また帰ってきます。あなたの方の側にいつもいる私になります。(中

略)自分が仏になろうとか観音になろうとかそんなことはまちがっていた。みんなの人が仏になるように観音になるように念仏し称名することだ。(中略)きょうのこの大転回を記念としてタンポポ堂日記としようか。その方がたのしいようだ。」と書かれています。

187冊目から215冊目(昭和37年10月から昭和38年5月)は「**詩国日誌**」と変更されています。ノートには、吉田から宇和島に転動してきてずっと詩が作れないスランプ状態が続いてきたが、やつと解消されたことを「どこか遠い処へ行っていた詩心が帰ってきた。『詩国』を(この年の7月に)創刊しながらも、詩そのものは帰っていない。それが今暁帰ってきたのだ。」と書いています。

216冊目から221冊目(昭和38年5月から昭和38年7月)は「**詩根**」、222冊目から224冊目(昭和38年7月から8月)は「**詩国帖根**」と変わり、225冊目(昭和38年8月)は「**詩国日誌**」に戻るなど短い期間で題名を変えています。

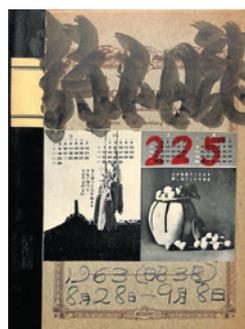
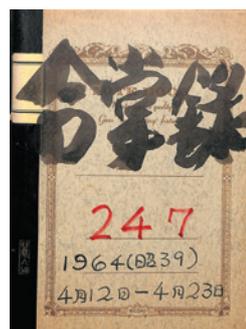
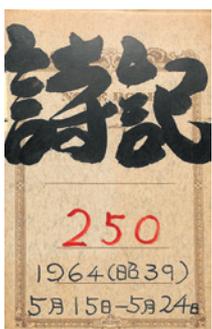
226冊目から246冊目(昭和38年9月から昭和39年4月)は「**坐忘記**」と変更されています。ノートには、「きょうから、毎暁書くのを坐忘記としよう。わたしの詩は坐のなかから生まれる。坐

を離れてわたしの詩はない。

247冊目から248冊目(昭和39年4月から5月)は「**合掌録**」と変更されています。ノートには、「ムームーというこした有無の区別も忘れ、坐!坐!という行意識をも捨て、ただただ合掌して生きてゆくわが身となろう。坐忘という語にもどうしても自我が残る。とくにわたしは、ひっかかるものがある。凡夫のわたしには合掌あるのみだと思った。」と書かれています。

249冊目(昭和39年5月)は「**金棒日記**」に変わり、「鬼に金棒、わたしに詩、これさえあれば、天下恐れる物はない、どんな苦境にでも、生き耐えてゆける、だからわたしの日記を、しばらく金棒日記とする」と書かれています。

250冊目(昭和39年5月)からは「**詩記**」になり、「このノートを詩記とするのは、死期の迫るのを知りながら書くという意味である。死はいつくるかわからない。だからこそただ一つのことをひたすらに求め、ただ一つの道をけんめいに歩かねばならない。詩に死して悔いがない覚悟を固めるためにも、詩記としよう」と書かれています。ようやくこの題名に落ち着き、この後796冊目でペンを擱くまで「詩記」を書き続けました。



「軽さ」が「涼しさ」になる

無一物が無尽蔵になるように

「涼しさ」



涼しさ (94歳)

春は花
夏はほととぎす
秋は月
冬雪さえて
すずしかりけり
これは道元禪師のお歌
仏教は
涼しい風である
涼しい人
それが仏身である
しんみんよ
涼しい人になれ

「坂村真民全詩集第8巻」204ページ

この詩は、平成15年真民94歳の時の詩です。真民には63歳の時に書いた

涼しさ (63歳)

良寛さんの
詩歌は涼しい
一遍さんの
念仏も涼しい
西行も芭蕉も
これを持つている
わたしも
この涼しさが好きだ

という詩があります。

また、随筆『一遍上人語録 捨て

果てて』の中で、「声ぞ涼しき」という人は、そういるものではない。如来の

風という。釈尊のお声も涼しかったにちがいない。それは、わたしにはわかる。一遍上人の声はたしかに涼しかった。それもわたしには、はつきりわかる。むろん、声だけを言おうとしているのではない。体ぜんたい、いや、その周囲一帯を言いたいのである。涼しい風を持つ人、持つてくる人、そういう人が本当の仏者なのである。

風は、体で感ずるのである。菩薩の風の涼しさ。わけても、観音の風の涼しさ。そこにひかれて、わたしはこの門をはいり、もう出ることのできない者となった。この何とも言えないサラサラとした風の味を、一人でも多くの人に知ってもらいたい。それがわたしの本願なのである。」と書いています。

坂村真民にとって、この「涼しさ」を持つている人、「涼しい人」とは、詩人・文学者の中では最も尊敬する芭蕉であり、良寛であり、西行でした。そして宗教家では、すべてを捨ててその身一つで全国を遊行した一遍上人を挙げられています。現世の人では、杉村春苔尼先生を先ず一番に挙げています。

ところで、この「涼しさ」という言葉に真民が特別な思いを持つようになつた最初の出来事は、昭和21年5月に

家族を連れて四国の八幡浜港に初めて上陸した時、一緒に九州から来た母が旅館に着いたとたんに「四国は涼しいなあ、いい風が吹くなあ」と言った言葉でした。

真民が「涼しさ」という言葉に込めている思いは、随筆集「念ずれば花ひらく」の中で「軽さが、涼しさとなる。それは無一物が、無尽蔵となるようなものである。わたしは如来の風ということを思う。そしてこの涼しさこそ、如来の風なのだ、仏教独自のものなのだと思う。(中略)もう何も言うことはない。仏法とは涼しき風なのである。」と書いていますが、この「軽さが、涼しさになる」という生き方、「軽さ」の中にこそ「無尽蔵」があるという「想い」を持つて生きることが真民独自の生き方なのだと思います。



世界の平和を願い続けるため エルサレムに真言碑を建立

おぼら やすお
小原 靖夫 さん(77歳)

神奈川県で税理士事務所と経営塾を営み、湘南・箱根朴の会の世話人だった小原靖夫さんは、第303番の真言碑をエルサレムに建立した。小原さんの熱意が多くの人々の心を動かして実現したその碑は、イスラエル国立植物園の美しい花の中から、世界の平和を祈っている。



現地での除幕式

八重の潮路を越えてゆく
念ずれば花ひらく

第三〇三番の真言碑よ

エルサレムの都は晴れて

野の百合たちも

鳥たちも

雲たちも

喜び迎えてくれるだろう

愛と希望と平和のため

永久に建ち続いてくれ

この詩は、1994年3月31日、エルサレムのヘブライ大学植物園に建立されるに先立ち、日本で入魂式をするときに、真民先生が作ってくださったものです。

初めて真民先生のお話を伺ったのは1988年11月24日。わたしの脳裏に焼き付くように残ったお話が、この碑のスタートでした。

「日本に育った者が、これから21世紀をよくするために何をなすべきか。私は若い人々に東の世界と西の世界の融和に励んでくれることを期待している。それは私が『二度とない人生だから』の中に願っているように、戦争のない世の実現に努力し、そういう詩を一篇でも多く作っていかうとしている

私と共に歩む人であり、そういう若い人々が一人でも多くあとをついでくれることを念じて(後略)」

わたしは素直にこの言葉に共感し、動かされました。イスラエルに平和が実現しなければ世界の平和はないと考えていたわたしは、日本人の心を世界に発信しようとして積極的に活動を始めていた人々に協力を仰ぎました。

多くの手から手に暖かい支援がうけつながら、遂にエルサレムの植物園の責任者ミヒヤエル・アビシヤイ教授に届きました。同氏はナチスの迫害を受けたポーランドからの帰還者。人間の残酷さを癒やす花のミラクルパワーを信じて、まだ荒野野であったこの植物園に最初の一粒の種を植えた人です。

「花を育てることは種を播くことから始まる。種は注意深く、時間をゆくりではあるが、愛をこめて育てあげれば、美しい花が咲く。必ず咲く。花の美しさは、言葉を超えて人の心をなごませ、心を清らかにする。そんな花をすべての人が愛している世界中の花をここに咲かせたい。時間はかかるが諦めません。必ず咲くのです(略)」

この方の感性は真民先生と全くと違っていいほど同じです。建立式に捧げ

られた祝辞です

「私は人間の持つ精神力について考えました。その力は土よりもまた火よりもまた石よりも強いものです。その精神力がこの石に碑を刻ませたのです。この精神力は日本人とユダヤ人が共にもっている人類愛と平和への信仰であります。二つの国と文化は遠く離れていますがお互いの持つ精神力を知り合うことは私達イスラエル人と日本人を近づけてくれます。戦争も平和もくぐり抜けてきた二つの古い伝統を持つ民族はお互いの精神力を生み出した根源の世界を知りたいという願いを抱かせてくれます。只今、除幕いたしました真民先生の『念ずれば花ひらく』が真の平和をこの中近東の地にもたらすことを願っています(略)」

2018年2月、私は20年ぶりにエルサレムに旅し、第303番碑と再会してきました。既にアビシヤイ先生は引退されていましたが、3代目の管理責任者の若いオフェルさんにお目にかかり、完璧な管理をしてくださっていることに感謝の意を伝えました。建立者の責任を果たした安堵感を抱いて帰国しました。

(文／小原靖夫)

坂村真民が愛した草花と木 ～野に咲く草花や木を詠った詩と写真とのコラボ～

期間 平成30年 10月20日(土)～平成31年 2月24日(日)

【開催趣旨】

坂村真民は、生きとし生けるものへの愛情を込めた詩を数多く作っています。

その中でも、野に咲く草花や木を詠った詩は、真民の純粹で清らかな心をそのまま表現した詩として、また、それらの草花や木に仏を見る真民の祈りの詩とも言えます。

今回は、これらの草花や木を詠った詩とその写真を一緒に展示することとしました。この写真は、この企画展のために、西澤館長が全国を回って撮り集めた写真です。もちろん、真民が実際に見た「タンポポ堂」に咲く草花や木も撮っています。

真民が敬愛していた杉村春苔尼先生の命日に必ず活けていた白百合の花など真民の思い出の花の詩をその写真と共に鑑賞していただく企画となっています。

【展示概要】

第1展示室では、坂村真民の代表的な詩の詩墨作品と真民の好きな禅語を掛け軸用にしたものなど、皆さんにもおなじみの「真民詩」と「真民の書」をゆっくりと見て、読んでいただけるものと思っております。特に今回は、森信三先生から頂いた手紙と書を2点展示していますので、こちらも貴重な展示となっています。

どうぞ、多くの方々のご来館を心からお待ちしております。

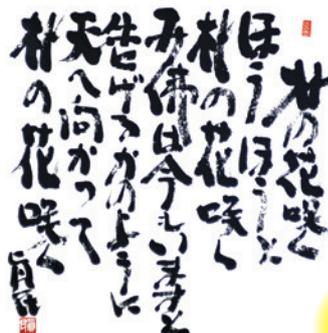


侘助



くちなし

真民の愛した花や木	主な展示作品	展示作品
くちなし	くちなしの花	くちなしの花 (原稿-額装)
白百合	白百合の花	春苔先生画 (デザイン帳)
あじさい	あじさいの花	あじさいの花 (詩墨-額装)
タンポポ	たんぽぽ魂	たんぽぽ魂 (詩墨-額装)
とろろあおい	とろろあおい	とろろあおい (原稿-額装)
侘助	あるがままに	あるがままに (原稿-額装)
つゆくさ	つゆくさの花	つゆくさの花 (原稿-額装)
朴ノ木	朴の花咲く	朴の花咲く (詩墨-軸装)



朴

坂村真民記念館を応援しています



経営理念

最大の会社より最良の会社
人さまに喜んで頂く仕事と
自分づくりをする



プラザ本店

[パチンコ店経営]

株式会社 宣翔物産

〒812-0857 福岡市博多区西月隈3-6-17 Tel 092-475-1151

[関連グループ会社]

株式会社 クリオ

ホテルクリオコート博多
〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街5-3 Tel 092-472-1111



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曾木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム To-be

78居室/20㎡~24㎡(1F&2F)



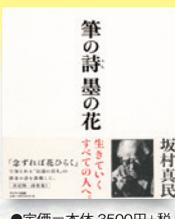
住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部

18居室/2LDK 40㎡~90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院横) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

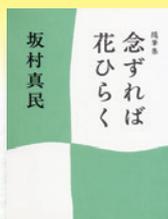
詩墨集
筆の詩墨の花



●定価=本体 3500円+税

坂村真民記念館
所蔵の作品を満載!

随筆集
念ずれば花ひらく



●定価=本体 1800円+税

初めての
随筆集を復刻!

念ずれば花ひらく



10万部突破の
超ロングセラー!

詩集
念ずれば花ひらく



詩集●定価=本体各1000円+税

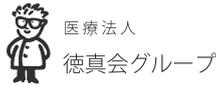
サンマーク出版

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
<http://www.sunmark.co.jp>

いま届けたい、生き方の道しるべ



詩集 二度とない人生だから



医療は 人なり

徳真会グループの想い

徳真会グループは、1981年新潟県の旧新潟市という地方の小さな町より始まりました。ユニット3台、スタッフ6名といったどこにもある様な歯科医院からスタートし、以来37年間、常に患者さま本意の歯科医療のあり方を追求し続けています。また、国会依存度の低い自立した組織運営を模索し、「世界が舞台」という意識で組織創りを行ってきました。

現在、年間90万人の患者さまにご来院頂く、世界最大級の歯科医療グループとなっておりますが、時代先駆の組織創りへの挑戦はまだまだ続きます。



新潟、宮城、東京、大阪、福岡に32医院。
詳しくはホームページをご覧ください。

徳真会グループ 検索



www.tokushinkai.or.jp

坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人、 観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧ください

【編集後記】 次回の企画展「坂村真民が愛した草花と木～野に咲く草花や木を詠った詩と写真とのコラボ～」のため、全国を回って「草花と木の写真」を撮ってきました。真民が好きな草花や木は、かつてタンポポ堂に植えられていたものがほとんどですが、図鑑や写真を見て憧れたものもあります。それらをすべて写真に撮る旅はとても楽しい旅でした。真民詩に登場する花はどんな花なのか、真民記念館では是非ご覧ください。皆様のご来館を心からお待ちしております。(西)

タンポポだより vol.26 秋号

平成30年9月1日発行 表紙写真：西澤孝一
発行元／坂村真民記念館友の会事務局
〒791-2132 伊予郡砥部町大南705 坂村真民記念館内
TEL089-969-3643 FAX089-969-3644

【坂村真民記念館】

開館時間／9～17時(入館は16時30分まで)
休館日／月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日～1月1日
入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、
小・中学生200円 ※15人以上の団体は割引あり